

紹介

丁玲の故郷を訪ねて

——湖南省臨澧、常德、桃源、長沙——

丁玲、本名蔣冰之。一九〇四年十月湖南省臨澧縣に生れる。一九八六年三月北京において逝去。「莎菲女士の日記」(一九二七年)「太陽は桑干河に輝く」(一九四八年)等で中國現代文學史上缺くことのできない作家であると同時に、中國革命と共に歩み續けた革命家であった。その波亂に満ちた生涯は彼女に豊かな文學を實らせた。とりわけ反右派闘争、文革と二十年もの歳月を奪われた後で、残り火が僅かなことを自覺しつつ、病身に鞭打ち、多忙な中を書きに書いた多量の文章は、鋭い人間洞察によって人を驚かしむる。最後の最後まで書き續けた作家という名にふさわしい作家であった。

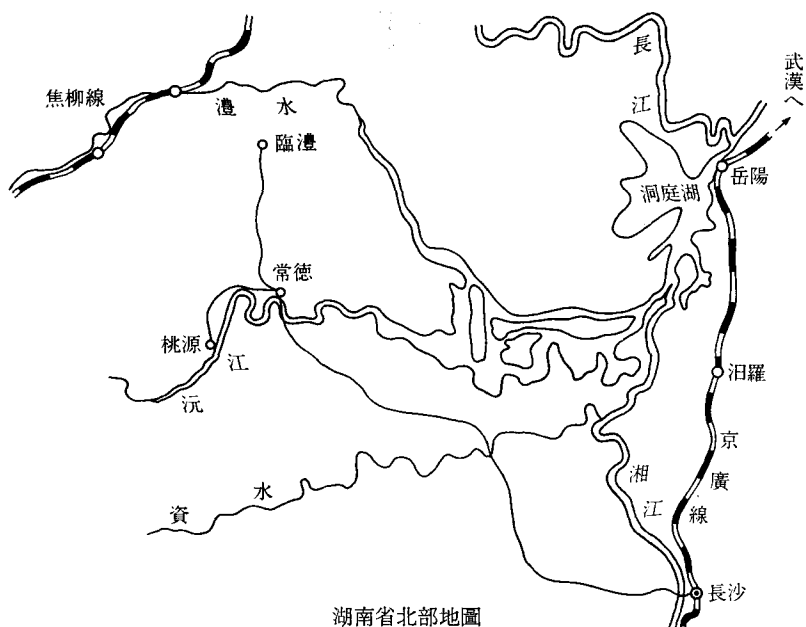
筆者は北京師範大學に留學中の一九九〇年七月、丁玲の

故郷を訪れるべく、湖南の地を踏み、丁玲ゆかりの臨澧、常德、桃源、長沙をまわった。丁玲の足跡をたどりつつ、紹介してみたい。

一、臨澧

丁玲の生れ故郷臨澧縣は湖南省北部に位置する。長沙から西北におよそ一六〇キロで常德、そこから更に北に約四五キロのところにある。臨澧の北方を湖南四大河川(湘、資、沅、澧)のひとつ澧水が流れ、洞庭湖に注ぐ。縣名は澧水に臨むところに由來する。縣城の南側は澧水の支流の道水に面している。清代には安福縣が置かれ澧州に屬した。民國三年(一九一四年)臨澧縣と改名。丁玲が生れた頃はまだ安福縣といていた。丁玲は四歳までここで暮らした。小さな縣だが今は開放都市になっていて、外國人でも手續きなしで行ける。

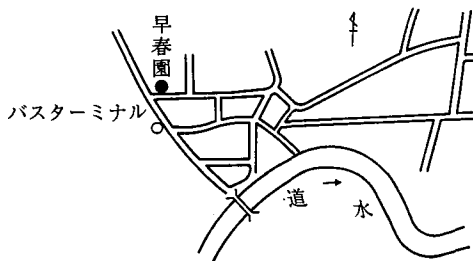
丁玲が亡くなって三年、臨澧縣城に丁玲の像が建立された。一九八九年十月一二日のことである。夫君の陳明氏他、共產黨の各級の指導者、作家、學者等百人近くが落成式に



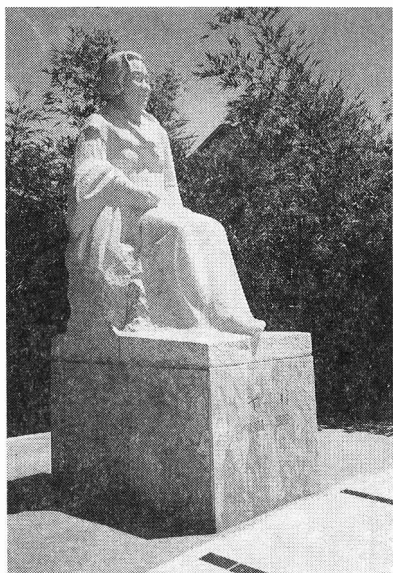
湖南省北部地圖

参加した⁽¹⁾。筆者が臨澧に着いて最初に目指したのがこの像
 だった。臨澧縣城はさほど大きくない。道幅の広いバス通
 りが町の南北を貫いていて、バスターミナルから二百米ほ
 ど北を東に折れたところに「早春園」という小さな公園が
 ある。地元の人は「丁玲公園」と呼ぶ。丁玲の像はこの公
 園の中にあつた。風にそよぐ竹を背に、足先を組み、右手
 に上着を掛け、靜かに坐
 っている。豐滿な體の線
 と微笑を浮べた表情は慈
 愛に満ちた母のイメージ。
 視線は斜め前方を遙かに
 臨む。丁玲の苦難續きの
 生涯と決して信念を失わ
 なかつた生き方を思う時、
 にこやかにかなたを見や
 る丁玲像は、見る者に勇
 氣を與えてくれる。

北京の中國現代文學館



臨澧縣城地圖



丁 玲 像

楊犁館長のお話によれば、將來臨澧縣に丁玲記念館を建てる計劃があるそうだ。丁玲の藏書や原稿等は、夫君の陳明氏が中國現代文學館に寄贈され、同館では現在丁玲文庫の準備を進めている。丁玲文庫には貴重な原資料を收め、一般的な物は故郷の丁玲記念館に展示する方針だという。

丁玲の生家は縣城から西へ十キロほどの農村にある。當時の地名で安福縣黑胡子冲、今の臨澧縣余市鎮高豐村である。⁽³⁾ところがここにたどり着くまでが一苦勞であった。一



臨 澧 縣 地 圖

九八六年に丁玲の生家を訪問された大阪女子大學の中島みどり教授から事前に「私が行った時は交通がたいへん不便でしたが」とのお手紙はいただいていたが、それは臨澧までの道程のことと勝手に思い込んでいた。中國で手に入れたばかりの丁玲の歸郷を主に紹介した書『丁玲在故郷』⁽⁴⁾に

縣城から三キロと書いてあったので、たとえばバスがなくても歩いてでも行ける、土地の有名な作家の生家なら誰に聞いても分かるだろうとたかをくくっていた。(陳明氏が常德市文聯を紹介して下さった手紙が入れ違いになって、文聯を訪ねなかったため、全く個人的な知人を頼って行ったのだった。)だが周囲の人は口をそろえて「行くのはやめておけ、行っても今はもう何も残ってないし、場所もはっきり知らない」と言う。そこを無理にお願いし、ジープで道を尋ねながら行くが、人によって正反對の方角を指さしたりする。困っていたところへ親切な人が同乗して道案内になってくれた。後で分かったことだがこの人は余市鎮政府の方だった。しばらく走ると車道からそれて丘の上へと入り込んで行く。全くジープであったのが幸いだった。そのうえこの土の道はどこどころかぬかるんでいて、水たまりでは車を降りて乗り切った。丁玲と陳明が一九八二年に臨澧に歸郷した時は、ダムの堤防まで来たものの、秋雨に煙る生家の方を見やりながら断念したという。⁽⁵⁾確かにいったん雨が降るとどうしようもなさそうである。そのダムは青い水面が陽の光

紹介

りに輝いて眩しかった。そこからジープでも苦しげな道を喘ぎ、農婦の指す方に丘をひと登りすると、煉瓦造りの農家に出た。

突然の珍客に、老夫婦が驚きつつ迎えてくれた。御老人の方は蔣保和氏、一九一一年辛亥革命の年に生れ、數えで



丁玲の生家（現在の蔣家）

八〇歲。丁玲の叔父にあたる。丁玲の曾祖父には五人の息子がおり、全五房。丁玲の家が大房で老人の家が四房というから、叔父といつてもむろん日本の感覺より遠く、丁玲の父の従兄弟になる。譚家珍夫人は、數え年七八歲。二人の息子と一人の娘、孫息子が一人に孫娘が四人いて、彼ら四房の人たちは皆ここに住み、他の人たちは外地に暮らしているという。

湖南の七月はたまらなく暑い、炎天下に汗した私達に夫人がとれたたのメロン(香瓜)を切ってくれた。「大變だつたでしょう。農村は不便だからね。」とねざらいながら、コの字形の家の廣い前庭にはコンクリートが打っており、早稻の收穫時とあつて一面に干してある籾を鶏がついばんでいる。土間でお話を聞いている間にも「ココーッ」と合の手が入る。

蔣家の元の家のことに話が及ぶと、今はもう跡形もない、残っているのはあの木の柱だけだと、片隅にたてかけてある太く長い古めかしい柱を指さされた。大官僚地主だった蔣家の往時の榮耀榮華と衰退そして懷滅を、この柱が見守

つてきたのかと思うと感慨深い。文化大革命の時特にひどく破壊されたそう。元の家屋敷の規模を尋ねると、五進(院子が五つ)もあり、花園も石獅子もあつたという。老人が「このあたりはみんな家だつた、今はその配置も分らない。」と言いつながら家の外をぐるりと手で示すが、家畜小屋と木々と草叢が目に入るばかりで、なるほど礎石すら残っていない。後で夫人が案内して下さつたが、隣の建物の前が大門のあつたところ、人の背丈を越すほどの草叢の間を引き返して視界の開けたところが、かつての花園。花園には池も橋も亭もあつたそう。現状からは想像もつかない。

實はここへくる前に、臨澧縣城の北七、八キロの修梅にある中國革命の元老の一人林伯渠の故居を參觀してきた。

(記念館として開館している。清道光年間築、一九八五年原狀通りに修復)兩端が反り上がった裝飾的な高い壁が美しい、二進餘の威風堂々たる屋敷だつた。ひととき大きな扁額に對聯、高い天井、内壁も床も戸も木だ。各部屋の木戸の格子に施された透し彫りが凝つていて、格子の下には物語の一

場面の彫刻もある。部屋は二つの中庭を囲んで全部くっついていて、中庭の上だけ空が四角に切り取られている。蔣家も家の造りは同じだったというから、参考になる。だが老夫婦は蔣家の方がずっと大きかったと力を込めて説明してくれた。

部屋数、一族の人数、使用人の数には、どれにも数えきれないという答えが返ってきた。老人の話では蔣家家譜が残っていて、臨澧縣の圖書館か博物館かに保存されているそうだが、残念ながら未見。丁玲の曾祖父の五人の息子のうち、一人が三百六十畝、新畝に換算すると二千畝餘、五房合わせて一萬畝以上の土地を所有していたというから相當なものだ。ここにくる道すがら、縣城を出てまもなく、「この邊から皆昔は蔣家の土地だったんですよ」との言葉を思い出す。

紹介



林伯渠故居



蔣家の丘の上から望む

蔣家の丘の上に立つと、田畑は足元に緩やかな起伏を以て廣がり、遙か向こうの丘に連なる。ずっと遠くには高い山も望まれる。この邊りは西方の武陵山脈の東端にあたり、なだらかな丘陵地帯になっているのだ。臨澧縣城のように平地で周圍に低い山が見えるのとは、ずいぶん趣きが違う。

こういう地形を目にしてはじめて、丁玲の小説「母親」(一九三三年)の情景描寫が理解できた。たとえば小説の冒頭、「金色の陽の光が、田野にふりまかれる。稻の刈りとられた田野に。遠く近くの小山にまぎ散る。秋の陽に色づきかけた愛らしい名もなき小山に。」まさしくこのように遠くあるいは近く低い山が横たわり、そのあいだに田畑が廣がっている。また「向かいの山裾のあたりでは、牛の背に乗った子供たちが、草のある場所をさがしてあるく。どの山からかコンコンと木を切る音が聞こえてくる。」⁽⁸⁾というふうに、山と山とがなだらかに連なっていて、こちらから向かいの山裾に動く人影が見える。何とも親しみのわく穏やかな風景だ。

いったい小説「母親」には、ふるさと臨澧の豊かな自然、農村の持つ魅力がふんだんに書き込まれている。しかもそれが單なる背景描寫にとどまらない。登場人物それぞれにとっての意味を持っているのである。たとえば、武陵(常德)の町に暮らす使用人老于にとっては、のどかな農村風景はしばしの間味わたるのびやかさであり、安らぎである。

江家(蔣家)の作男長更にとっては、自分の若い力を投じ、收穫の喜びを感じる、生命の充實感そのものである。江家を支える女中の么老媽にとっては、つぶれそうな家を再興する依りどころとなる家畜や作物が、一切をきりもりする彼女の誠實な責任感と深く結びつき、彼女自身の存在意義でもある。小菡(丁玲)にとっては、自然と戯れ、小動物を友とする生活は、自然と一體となりうる黄金の幼年時代である。その天真爛漫さ、汚れなき童心が、暗雲襲う一家の運命に美しい點景を添える。そして主人公の于曼貞(余曼貞)にとっては、夫を亡くし借金を抱えて困窮する身に春の息吹が生きる勇氣を與えてくれた。この愛すべき自然は子供たちと自分の世界である。だが町の女學堂に入學し新しい生活を切り開こうと決意した曼貞には、農村の家は決別すべきものとして自覺されるようになり對立する。

これだけ多くの人間にとっての自然の意味をみごとに書き分けた農村描寫は、丁玲の筆力が並大抵のものではないことを示す。それまで「莎菲女士の日記」に代表される、大都會のインテリ少女の反逆心と煩悶をえぐってきた丁玲。

それはある意味で自己の心の解剖のようなものであった。だが「母親」にいたっては、自分を登場させながら自己を無にし、客觀的にそれぞれの人間を捉える。丁玲文學の轉換點の一つは「水」（一九三一年）であり、農民の暴動を描いた。だが洪水という自然の猛威は迫力を持って書けたが、一面的であり、集團の農民のエネルギーは傳わるが、存在感のある人間がない。「水」の翌年に書きはじめられた「母親」が種々の人間を多面的に捉えるようになって驚く。自然描寫の描き分けはその一例に過ぎない。ここに丁玲が「母親」にかける意氣込みの強さをみると同時に、後の「太陽は桑干河に輝く」で複雑に絡み合う各層の人間を描き出すことができた素地がある。

その小説「母親」を理解する上でも、舞臺となる丁玲のふるさとの山川を自分の目で確かめることは、私にとって大きな課題であった。そして實際来てみて、自分の頭の中にあった平地に山が見える盆地のようなイメージを丘陵地帯のそれへと修正したのであった。また小説ではあまりに美しく書かれている自然にたいし、郷愁のせいで美化して

紹介

いるのではないかという疑念も抱いていたが、深い山奥でもなく、田畑がはてしなく續くわけでもなく、荒涼とした大地でもない、母の懷に優しく抱かれるように起伏する風景に妙に愛着を感じ、得心がいった。

ただ小説の中で幼き日の丁玲小蘭が石を拾って遊び、その清らかな流れがしばしばふるさとの象徴として曼貞をはじめとする人々の意識に上る小川、靈靈溪が見當たらなかった。余市の邊りで道水に流れ込むまたの支流の一つであらうが、蔣家の付近にそれらしい川がない。丘陵地帯を時には地中を潛り、時には空高く橋架けて立派に整備された灌漑用水があったが、この用水に變じたか、あるいは可能性としてもっとも高いのはダムの底になってしまったのかも知れない。小説の中で印象が強いだけに残念である。

丁玲は故郷臨澧にどんな感情を抱いていたか。一九八二年に歸郷した折の講話で、次のように語っている。「我對臨澧沒有感情」「我從小對姓蔣的人就沒有感情、同普通的人的感情都不可能有」^⑨。故郷の人々を前にしてこう言う率直さには驚くが、これには理由がある。丁玲の父蔣浴風は

お坊ちゃん育ちの風流人だったが、道樂で家産を使い果たして病死し、莫大な借金を残した。しかも債權者はすべて蔣家一族の者で、父が亡くなるとひっきりなしに取り立てに押し寄せた。三〇歳で寡婦となり一男一女を抱える母は、土地屋敷をすべて賣り拂って返済に充て、常徳の弟の家である實家に身を寄せ、常徳女子師範に入學して教師として身を立てる道を切り開いたのである。このことはかえって母を封建の大家庭の桎梏から解放する役目を果たしたと丁玲は後に評價しているが、大金持ちの蔣家一族が寡婦を食い物にした酷薄な仕打ちにたいしては恨み骨髓に徹していた。しかも家屋敷の賣却を仲介した伯父は二百吊の金をピンはねした。丁玲一八歳の時、上海に出て上海平民女學校に入學しようとして、その費用捻出の爲に母と臨澧に戻り、上記の金の返却を求めた。またおよそ蔣家の子弟で省城長沙に求學する者には毎年十穀、省を出て學ぶ者には毎年二十穀、蔣家の祠堂が補助するという規定があったのだが、女子には補助しないと拒まれた。金も返してもらえない。怒った母は「この金はもともと蔣姓のもの、あんたたち蔣

家の金なんかいらないわ、私達が飢え死にするかどうかみたらっしゃい」と言って證文を引き裂いた。この時以來丁玲は臨澧に歸っていない。¹⁰⁾

つまり四歳で臨澧を出てから、一九二二年と一九八二年の二回しか訪れていないのだ。解放後の一九五四年に湖南に歸り常徳まで来た時も臨澧には行っていない。最後の一九八二年の時も、もともと文藝誌『芙蓉』に招かれて長沙に行ったのであり、常徳に歸るかどうか躊躇している時に黨の常徳地區委員會からの歡迎の電話で歸る決心がついた。臨澧に至っては、桃花源に遊び、桃源の母校を訪れ、北部の景勝地張家界と索溪峪に遊んだ歸途澧水のほとりまで来て、出迎えた臨澧縣の責任者に請われ、やっと立ち寄ったのである。¹¹⁾丁玲も「心を熱くして」「目の縁に涙を浮べて」應じているから、むろん歸りたくなかったわけではない。ただ反右派闘争、文革といった不幸な歴史が、お互いにわだかまりを残したのかも知れぬ。私達が丁玲の生家に行くところのをよってたかって止めようとしたこと。「(幼くして離れたから)臨澧は丁玲に何も與えなかった」と言った

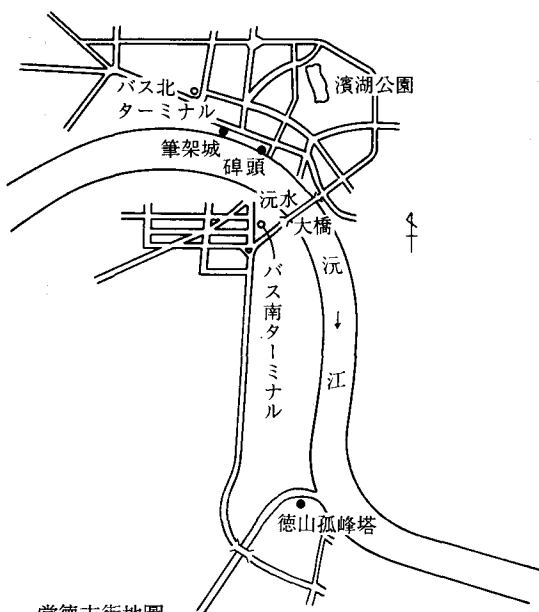
臨澧のある人の言葉。臨澧と丁玲は微妙な関係にあったようだ。

それでもやはり故郷の発展には喜びをかくさず「今回私はまた湖南に歸ってきました。臨澧に來ないのは人情がなにかのようです。でもよく考えてみますと、この土地にはやはり親しみがあります。なぜなら故郷の人々の生活が氣にかかるからです。三日間の短い間に、ここがいろんな面で大きく變化したのを見て、たいへんうれしく思いました。」と語っている。臨澧に着いた翌朝から縣城の變貌ぶりを知らうと街を歩き回り、工場や農村、ダム、發電所等の參觀を精力的にこなし、澧水兩岸の七公社を訪れたという。⁰⁴

筆者は以前の臨澧を知るわけではないが、邊鄙な田舎を想像していたので、眼前の二、三十メートルはある廣い目抜き通りの兩側にビルが整然と立ち並ぶのには驚いた。映画館にはアメリカ映画が掛かり、ダンスホールも數軒。泊めて頂いたお宅は土地を買って自分で建てたという眞新しい廣々とした二階建て。周圍には同じような洒落た一戸建

てがずらり。裏手の水田に出ると、刈られたばかりの田の隣に生育途中の稻、そのまた隣は田植をしたところという具合に、稻作の全過程が一度に見られるのが面白い。早稻、中稻、晚稻と三回收穫できるのでこういう光景が可能なだろう。前述した大規模な用水路といい、農業だけをとってもかなり豊かに見受けられた。

臨澧縣には文學紙として『青年文學報』がある。一九八九年二月創刊、南方青年文學社發行、編集委員會の住所が丁玲公園内になっている。（一九八六年五月發刊の「涼水井」がその前身、青年たちが自ら資金を出して作った。）編集委員の方に創刊號以來の綴じ込みを頂いた。丁玲關係の記事は二篇。詩を中心に散文、小説、評論なども載せ、みずみずしい感性が感じられる。湖南新郷土詩を推進し、數多くの文學青年を育て上げ、將來性豊かに見えた。ところが一九九〇年二月の第八期（總二十期）に「終刊の辭に代えて」が載って終わっている。文面からして、六・四事件後の出版統制で全國的に文藝誌の停刊ラッシュの中、『青年文學報』もあおりをくったらしい。丁玲の故郷に芽生えた文學の小



常德市街地圖

さな命が再生するのを願ってやまない。

二、常 德

臨澧から南へ約四五キロ行くと、丁玲が育った町常德である。昔轎でまる一日の道程を今はバスで二時間足らず。

幹線道路だけあって、客がいっぱいになると發車するバスがひっきりなしに出ている。湖南四大河川の一つ沅江の下流が、常德のあたりで大きく蛇行し、洞庭湖に注ぐ。沅江は常德の町を貫き、沅水大橋が南北を結ぶ。水陸共に交通の要所で、商工業の中心、湖北の重鎮である。明、清の頃は武陵縣、常德府に屬し、民國二年（一九一三年）常德縣と改名。解放後數次の變更を経て、一九八八年に常德市が成立した。

一九〇九年、弟の手紙で故郷常德に女子師範が開設されることを知った丁玲の母は、幼い丁玲とその弟を攜え、活路を求めて常德に歸った。翌一九一〇年秋、常德女子師範の開校と同時に母は師範科に、丁玲は幼稚科に入學。辛亥革命による閉校の後、母について長沙や桃源に行くが、一九一三年に常德に戻り、一九一八年夏に常德の小學校を卒業した。よって丁玲は幼少年時代をほとんど常德で暮らしたことになる。臨澧には何ほどの印象も残さなかった丁玲だが、常德には「一種特殊な感情を抱いていた」と語る。これには常德で教育事業に全精力を傾けた母への思慕が強

く結びついている。

丁玲自身の幼年生活はたいへん孤獨であった。それは「母親」の後半部分と短編小説「過年」（一九二九年）とにみることができる。丁玲はどちらにも小茵という名で登場する。叔父の家に身を寄せているため、紅い漆塗りの大きなベッドで眠り、下女に仕えられる身でありながら、叔父叔母に氣兼ねし、いとこたちにいじめられるという環境の下で、敏感で寡黙な子供になった。母が苦學しているため、幼い魂は寂寞に耐えていじらしい。その心の傷は「過年」の方により強く出ている。「母親」では小茵の天真爛漫な童心を強調しているためかえて哀れに感じられる。

一家が寄宿していた母の實家の余家は常德の名門、祖父は太守（府知事）をつとめた。生家の蔣家と母方の余家という兩大官僚地主の家に生れながら、特殊な疎外された位置にあったために、その矛盾がよく見えた。後に革命に参加する「火種を與えてくれた」と丁玲は言う。⁶⁶

常德の余家の一族に漢學者故余嘉錫氏がいる。その令嬢で北京大學教授周祖謨氏夫人の余淑宜女史が御健在で北京

紹介

在住。筆者は一九八九年秋に訪問し、余家と小説「母親」とについてお話を伺ったのでここに少し紹介したい。故余嘉錫氏は丁玲と同じ世代に屬し、「母親」の中では二姪少爺として一カ所登場する。余淑宜夫人にとって丁玲は父方のおばの代（姑母）、丁玲の母は父方の祖母の代（姑祖母）にあたるという。余家の中では、湖南にいる丁玲の一番下の従姉妹（表妹）が存命の場合は別として（數年前までは存命だった）、余淑宜夫人が最年長だそうだ。余淑宜夫人の口から小説「母親」の人物は皆實在する（「人物都眞實」）ことが確認できた。丁玲らが身を寄せた叔父（舅父）は小説では雲卿だが、實名は余笠雲（笠の字は記憶が定かでないとのこと）、夫人は蔡姓、長子が伯強、次子が仲剛。丁玲の従姉妹は表姐が掌珠、表妹が慧珠と環珠といったそうだ。おもしろいのは、小説に大姪少奶奶として登場する丁玲の伯父の嫁で、謠ものをうたったり、笑い話をしたりして皆を楽しませる道化師のような人物まで實在したことだ。余淑宜夫人が子供の頃すでに相當高齢だったといい、夫人も何かの話の一節を聞いた覚えがあるそうだ。こんなところにもかつての

大家庭の特色がよく出ている。

ただ「母親」は構成不足（結構不十分）だとおっしゃる。

實際の余家はもっと複雑だったであろうことは十分想像できる。特に執筆當時叔母が健在だったので遠慮した（「舅媽不敢寫多、不夠充實」）、いとこたちも健在だったから、丁玲をいじめたところがあるので、突っ込んで書けなかったのだと。この叔母、小説の中では聰明で有能だが性格的にかなりきつく陰險に描かれている。それでも書き足りないのだから、よほど個性の強い人だったのだろう。たとえば自分の娘に纏足させようと考えてるなど保守的で、この立派な纏足をした御大家の奥様の叔母と、女學堂に入り纏足も解いて自立への道を歩む曼貞とは好對照をなしており、曼貞の新しい生き方を際立たせている。確かにもっと書き込めば、作品がよりふくらんだはずだ。また御大家のお嬢さんとして將來が約束されている従姉妹と、父を亡くし没落した貧しい家の娘小茵との運命の對比は、時代の新しい息吹の中で、共に幼稚園にはいり、女の子でも學問ができる環境へと變化してゆく時、その後の展開が期待できたが、未

完なのが残念である。

丁玲が寄宿した叔父の家は常德の後街にあり、余淑宜夫人の家は西門萬壽街にあったそうだが、常德の町は抗日戦で焼かれて何も残っていないという。

その言葉どおり、今の常德は古い町並や遺蹟がほとんどなかった。横丁の一角と河べりの一角に木造のかしい家がひしめいているのを目にした以外は、とりたてて特徴のない新しい町になっていて、武陵古城をしのぶすがもない。埠頭の獨特の活氣は印象的だったが。

僅かに現存する遺蹟の一つは、沅江の堤の上にある元代の筆架城。文運興盛を象徴したそうだが、煉瓦で築いた人の背丈の倍ほどの五つの突起が、真ん中が一番高く、なるほど毛筆の筆立てそっくりでユニークだ。もう一つは、濱湖公園内の鐵經幢。經幢はふつう石柱だがこれは鑄鐵なのでめずらしいらしい。北宋のものと推定され、もと徳山の乾明寺にあったのを一九七九年に市民の憩いの場濱湖公園に移した。丁玲は子供の頃、清明節のときよく徳山の乾明寺に遊んだという。唐初に創建された乾明寺は抗日戦争

の時に破壊されたが、残った鐵經幢は文革を生き抜き、やはり文革を乗り越え歸郷して濱湖公園に遊んだ丁玲と再會した。^m 何とも因縁めいた話である。

徳山は常德の東南約七キロにあり、沅江を隔てて常德の市街と向き合っている。主峰孤峰嶺でさえ海拔九七・六メートルしかないが、平野にぱつこり突き出ているので遠くからでもよく目立つ。その孤峰嶺の頂きに孤峰塔(別名文峰塔、地元の人々は寶塔と呼ぶ)がそびえる。明の萬曆三十五年(二六〇七年)に建てられ、文革中の一九六九年に打ち壊されたが、一九八八年春に再建された。丁玲歸郷の折、「徳山孤峰嶺の寶塔はどうして見えなくなったの」といぶかり、破壊されたことを知らされて沈黙したそうだが、ここに願いどおり復原された。眞新しい七層八角の塔は端正で、乳白色の塔身に橙色の瑠璃瓦が青い空に映える。中の螺旋階段を登ると各層の環狀廊に出、四方を見渡すことができる。最上層からの眺めはすばらしく、眼下にゆったり流れる沅江、遙か北の常德の町、果てしなく廣がる田畑、山裾にひしめく工場群などが一望の下にある。吹き渡る風に生き返

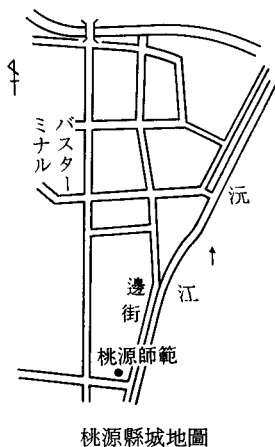
った心地がした。

三、桃源

「自由な天地」を求めて中國の大地を飛翔し續けた丁玲が自らの翼で最初に飛び立ったのは、一九一八年、丁玲一四歳の年だった。この年の夏常德の小學校を卒業した丁玲は、桃源女子師範を受験、首席で合格する。

桃源は常德の西南、大きく蛇行する沅江を溯ること約四五キロ、陸路なら約三五キロのところにある。當時は水路を往來、丁玲も小蒸氣船に乗って來た。今はバスの便が良い。

桃源縣の縣城は沅江の西岸に沿って南北に伸び、桃源師



範學校（かつての省立第二女子師範¹⁹）は町の南端、河沿いの通りに面している。この通りは實にしっかりとっていて、家々の切れ目より沅江の滔滔たる流れが垣間見られ、對岸になだらかに起伏する小山の緑が目によさしく、プラタナスの並木といい、店々の木戸のたたずまいといい、不思議と心ひかれる。しばらく行くと、一列に並んだ店の屋根越しに黒瓦に白壁（黒ずんではいるが）の重厚な造りの風格ある建物が見えてきた。さてはこれがそうかと見當をつけて行くと、果たして湖南桃源師範と書かれた古い門に出た。だが今は使われておらず、もっと先に真新しい立派な校門ができていた。中に入るとまず運動場の廣さに目を見張る。校舎は整然と並び、運動場の奥には建築中のものもある。何と大きな學校だろう。「今でもこのあたりの教師はたいいてい桃師出身なんですよ、私も桃師を出ました」とここへ来る前にある湘西の先生から聞いた言葉を思い出した。

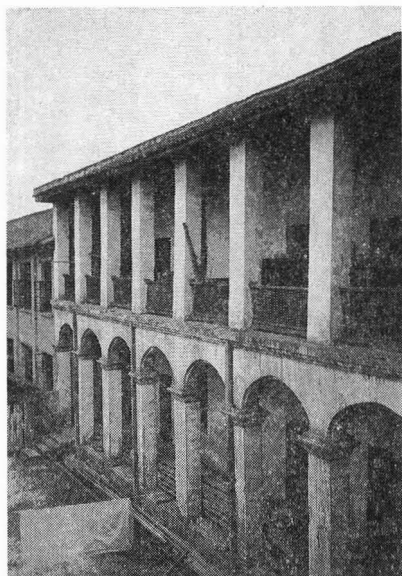
丁玲はこの學校がいっぺんで好きになった。「今景色の良い、田舎の大きな學校の中にいて、本當に自由に感じました。同級生も皆沅江上流の各縣から來た人たちで、わり



表通りから見た桃源師範の舊校舎

あいあけっぴろげで明るいのです。それで私はこのゆったりした新しい生活を思う存分に享受しました。」²⁰

成績も非常に良く、校長からは學校の眞珠と稱えられ、丁玲はのびのびと學校生活を樂しんだ。何と彼女が學んだ校舎が今も残っている。さきほど表通りから見えた建物が



桃源師範の舊校舍

そうだった。二階建てで鉤形になっている。一階の柱は太いアーチ状で、美しいフォルムだ。案内してくれた先生によると、ローマ風に建てたのだという。²¹⁾ 階段や廊下の木の床がミシミシと音を立て、剥げ落ちた漆喰に歴史を感じる。黒ずんだ木製の机と椅子が積み重ねてあった。現在は物置に使われているが、将来は記念館にするそうだ。丁玲も一九八二年に歸郷した折母校を訪れ、當時の校舎が残っていると知って興奮した。「あの二階が私達の宿舎で、下が教

室、あそこで授業と自習をしたのよ。」²²⁾ 丁玲はしょっちゅう二階の寢室の窓べに立ちつくし、木立の間から沅江を行き來する帆船を眺め、船歌に聞き入ったという。²³⁾ とすれば丁玲の部屋は、鉤形の建物のうち南北に長い方だったのだろう。ちょうど表通りから見えた並んだ窓のうちのひとつだったに違いない。川風に吹かれて陶然とする少女の姿が思い浮かばれる。

その校舎の隣に當時の講堂も残っていた。こちらは瓦屋根も煉瓦の壁も真っ黒である。どっしりしていてかなり大きい。「あのころ私達はここで集會を開き、講演會や夜會レクリエーションを催したりもしたんです。」²⁴⁾ そう、丁玲にとって桃源女子師範は「五四」の洗禮を受けた記念すべき地であった。「五四」の波がこの小さな町を襲うと、上級生はすぐさま學生會を作り、毎日集會を開いて時事を論じ、愛國・反帝反封建を宣傳し、町ヘデモに繰り出した。丁玲も「後ろについて」参加し、學生會が開いた貧民夜學では珠算の先生をした。斷髪も敢行し、おさげを切るなんて當時は大事件だったので、いたるところで嘲笑と罵言を

かったという。今でも小さな田舎町、そのころ斷髪した女學生がいかにも目立ったか、想像できるような氣がした。

だが丁玲は全く白紙の状態で「五四」を迎えたわけではなかった。「私個人の思想は、母の影響を受けて、わりあい複雑でした。封建社會、舊社會にとっても不満でした。舊社會を改造するというぼんやりした考えを持っていましたが、いったいどのように改革し、どうすべきか、定まった考えは全くありませんでした。」⁽²⁰⁾ 丁玲の母はこの頃常德に婦女儉德會を組織し、附屬の小學校を作り、さらに貧しい家庭の女子のために働きながら學べる「工讀互助團」を作るなど、社會に貢獻しようとい力を盡くしていた。この進歩的な母の生き方が、丁玲に漠然と舊社會への不満を抱かせていたのである。

もう一つ、その母に大きな影響を與えた親友、後の有名な婦人革命家向警予の存在がある。向警予は常德女子師範で母と同級になり、學友を集め義姉妹の契りを結んで、男女平等、教育救國を誓いあった仲であった。小説「母親」にも愛國心の強い血氣盛んな女學生夏眞仁として登場する。

自分の年の半分ほどの若い向警予に母は心服していた。彼女が長沙と故郷の淑浦を往復する度に、常德に立ち寄って母の學校に泊まり、「花粉をまく蝶のように」長沙で見聞きたしニュースや新思想、抱負や理想を母に語り、それは母の行動の指針となった。また桃源女子師範に入った丁玲の同級に、向警予が長沙の周南女學校を卒業した後故郷に作った小學校淑浦女校出身の者がいて、校長向警予の教育方針と彼女がいかにも生徒から慕われていたかを話してくれた。「そういうわけで母を除いて、そのころ私が一番信奉していたのは、他ならぬ九姨（向警予）でした。」⁽²¹⁾ その向警予の故郷淑浦は、目の前の沅江のはるか上流の支流淑水の河畔、湘西の山々に抱かれた、山清水秀なところと聞く。沅江は向警予の革命に燃える熱い心を運び、少女丁玲の夢想と希望を載せ、洞庭湖を通じて外の世界にいざなつた。丁玲は母と向警予の影響で「五四」を受け容れる素地ができていた。そこへ「五四」がやってきて、社會を改革する道を探す氣持ちを芽生えさせた。だが普通の師範學校では探し當てられない。そこで繰り上げ夏休みで常德に歸っ

た丁玲は、母と轉校の問題を話し合った。母は長沙の周南女子中學が進んでいて、新しい思想があると勧めた。校長

朱劍凡は進歩的人物で、向警予や蔡暢もこの學校の出身であり、「五四」の時の活動も評判だったからである。おま

けに朱劍凡は母が長沙の湖南省立第一女子師範で學んでいた時の校長であり、管理員の陶斯咏は第一女師での同窓でもあった。十元の保障金以外は一切無償だった師範と違い、私立の周南女中へ移るのは經濟的にたいへん苦しかったが、娘に社會に貢獻し社會を改革するよう期待した母は、丁玲の要求をのみ、自分で長沙に連れていった。一九一九年秋のことである。丁玲は二年生に編入された。

四、長 沙

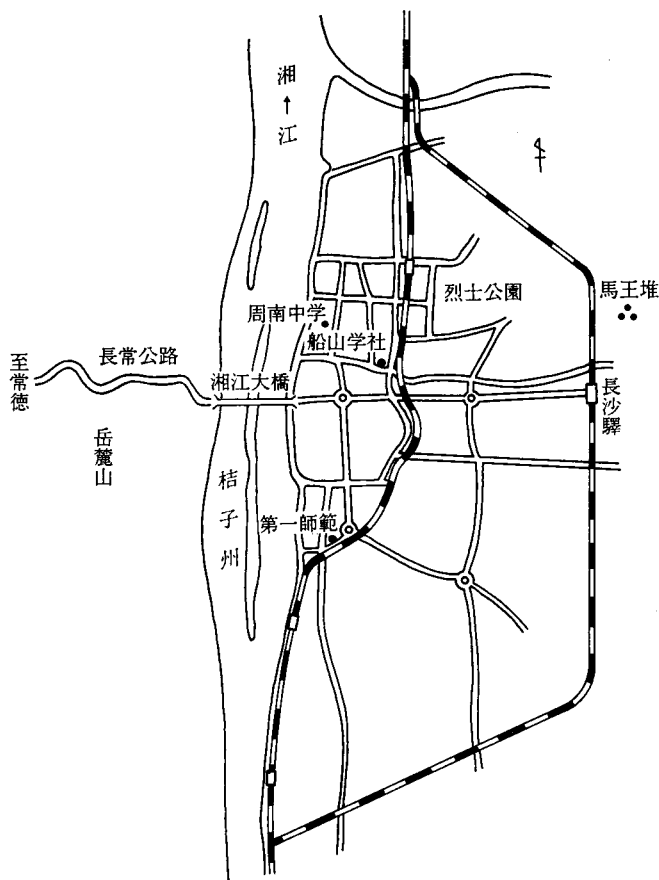
當時常德から長沙へは汽船で廣義の洞庭湖を渡った。今は常德と長沙を結ぶ常長公路が良い道で、バスで六時間であいてしまう。岳麓山の麓にさしかかり、湘江大橋を渡ると長沙の市街地である。さすがは省都、北京を出て以來久し振りに見る大廈高樓にロータリーと立體交差。ただ長沙

の夏の暑さは猛烈で、車窓に吹き込む風がドライヤーの熱風のようなのに閉口した。

周南女中は、今は男女共學の周南中學となっていて、湘江沿いの庶民的なたずまいの街並の中にある。小さな店が賑やかに軒を連ねる横丁を入った所なのだが、道が入り組んでいてわかりにくく、何度も堂々巡りをしたあげくに裏門（通用門）にたどりついた。親切な先生が路地を一回りして正門に連れて行ってくれ、「僕も最初この學校に配屬されて來た時は道に迷いましたよ」と言って笑った。

朱劍凡が女學堂を創設したのが一九〇五年、今年一九九〇年は八五周年記念にあたり、『周南中學八五周年校慶記念冊』を頂いた。丁玲が一九八二年十一月十日に母校を訪れた時の談話「丁玲大姐在母校的一次談話」も收録されている。今私達が坐ってお話を伺っている會議室で、丁玲が母校の教師生徒代表を前に話をした。「私は周南では啓蒙段階でした。周南は政治の上で私の革命指向を培った方が多いのですが、文學への愛好も育みました。」

丁玲が編入した翌月の一九一九年十月に周南女中の學生



長沙市街地圖

は革命週刊「女界鐘」を創刊し、十一月長沙の花嫁が両親の決めた結婚に抗議して嫁入り轎の中で自殺した事件に特

義は大きい。丁玲はその文學指向を強めた。周南が政治的文學的に丁玲にとって啓蒙段階だった所以である。

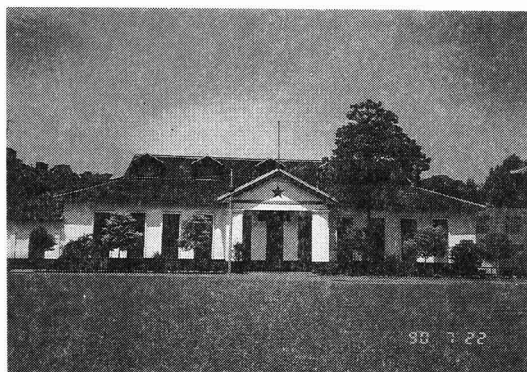
集號を出し、毛澤東も「評趙五貞之死」を載せ、大きな影響を持った。また五四運動に引き續いて長沙では軍閥張敬堯を追放する運動が起こるが、周南の學生は積極的に參加した。⁸⁰⁾ 丁玲は學生會のリーダーだったわけでもなく、特に政治的活動はしていないが、周南の濃厚な政治的雰囲気⁸¹⁾に感化されたことは間違いない。

當時丁玲にもっとも影響力が大きかったのは、新民學會員の國文教師陳啓民で、彼の選ぶ教材「新青年」や「新潮」によつて、新思想、新文學に接した意

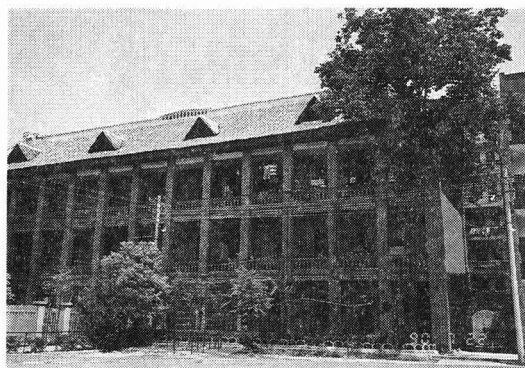
校内を案内してもらいながら「周南中學は有名人が輩出していて素晴らしいですね」と言うのと、「ええ昔はね。今は普通の學校です」と謙遜されたが、『周南中學八十五周年校慶記念冊』を見る限り、今も長沙屈指の中學のようである。創始者朱劍凡の塑像があった。日本軍による長沙大火で昔の校舎の大半が焼失したが、當時の講堂と寄宿舎が一棟残っていた。

講堂は先ほど通ってきた裏通りから見た時はいかにも古めかしかったが、正面は美しく修復されていた。寄宿舎はその隣の赤煉瓦の二階建て。どちらも屋根に窓がついていて、瀟灑な感じがする。この二つの建物へ行くには運動場を横切らなければならないが、ここは元は池で、思源橋という橋がかかっていたという。同窓生はこの風雅な池を懐かしみ、池のほとりにあった思源亭を一九八九年十月に再建した。傍ら

紹介



周南中學の舊講堂



周南中學の舊寄宿舎

には石造りの噴水もあり、潤いを與えている。周南の生徒の愛校心の強さを垣間見たような気がした。
丁玲は周南にも長くは居なかった。一九二二年夏、學校側が陳啓民の思想が過激だとして解雇すると、これに不満の學生たちが退學し、自主的に夏季補習クラスを編成、丁

玲もこれに加わった。夏季補習クラスは王船山の書院で行なわれたが、筆者が行った時船山學舎は改修中で、中には入れなかった。一カ月後丁玲は學友と共に男子校の岳雲中學に轉校した。女生徒が男子校に入るのは當時の湖南でも劃期的な事件であった。岳雲中學は『丁玲紀念集』に弔電が載っているので現在もあるはずだが、訪れなかった。しかし丁玲は岳雲中學にも飽き足らない。「私は勉學の前途に對し、何を學びどの道を行くのか、いつも頭の中で考えていて、模索し前進したいと願っていました。しかも相變わらずいささか彷徨と苦悶も感じていました。」

理想を追い求め、眞理を模索し續けた少女丁玲。すでに桃源女師時代斷髪をやつてのけ、周南女中の政治的環境の中で舊禮教と闘う勇氣を得、叔父と渡りあつて従兄弟との婚約を解消し、男子校への入學も遂げた。着實に前進してきたものの、まだ明確な指針を得られない。丁玲は苦悶し、友に誘われて上海平民女學校に入る決意をする。一九二二年春、丁玲は初めて故郷湖南を出、「胸一杯の幻想を抱いて」上海に旅立った。だが丁玲の彷徨はまだまだ續く。そ

してこの彷徨と苦悶こそが、後に「莎菲女士の日記」の叫びとなり、作家丁玲を生み出したのである。

丁玲にとって故郷湖南は、父の死によって封建的大家庭の束縛を脱し、母の支持と勵ましのもとで自由に翼を廣げ、革命的風土のおかげで進歩的な友人・知人・教師・學校を得、新思想と新文學を吸収し、政治的文學的に基礎を築いた土地であつた。あくなく眞理を探索し、光明を追求する丁玲の姿勢もここで培われた。すぐに理想を見出すことはできなかったけれども。

臨澧、常德、桃源、長沙と、丁玲の足跡をたどつて來た私の旅はここで終わり、丁玲が上海の次に向かった古都北京へと、舞い戻つた。
(京都大學 三枝裕美)

注

- (1) 臨澧縣の文學紙『青年文學報』第八期(一九八九年一〇月)「本報特訊」より。

- (2) 丁玲塑像簡介(塑像の裏面の碑文)「丁玲原名蔣冰之一九零四年十月生于湖南臨澧一九八六年三月逝世于北京爲紀念這位在國內外享有盛譽的現代女作家繼承先輩遺志激勵後輩奮進

一九八六年五月經中共中央宣傳部批准共青團臨澧縣委在全縣廣大青少年中開展爲丁玲塑像募捐活動得到了全縣青少年的熱情響應同時得到了社會各界及丁玲同志生前友好的大力支持該像由全國著名雕塑大師劉開渠先生擔任藝術指導著名雕塑家張得蒂教授創作郭東清王德雲周士杰同志刻像像高二點四零米一九八九年五月落成」

(3) 『青年文學報』第八期「光輝的歷程 不朽的靈魂——爲丁玲塑像揭幕而作」の記載。なお一九八九年一月 中國文联出版公司發行『丁玲在故鄉』六七頁「日本友人的心願」(中島みどり氏が丁玲の生家を訪問した時の記事)によれば、丁玲の曾祖父は黒い立派な髭を生やして黒胡子和呼ばれて慕われ、それでここを黒胡子冲といったという。

(4) 注(3)参照。

(5) 上記『丁玲在故鄉』「日本友人的心願」。なお常德の文學雜誌『桃花源』一九八三年第一期の徐紹鈞「一代文宗革命人——記丁玲同志故鄉行」によると、道がぬかるんで丁玲は沃沙溪の生家に行けず、向陽ダム管理所で親戚の人々と會つたとある。筆者が蔣家でお話を伺った時も、あの日は雨で洗われて道が悪く、丁玲が家まで来れなかったということだった。ただ蔣家のほうでも、元の家はすっかり取り壊されて何も無い、ただの野っ原だ、茅屋に茅庵だから来ないでくれと傳えたらしい。丁玲の歸郷後、千二百元かけて二棟建て増したそう。

紹介

(6) 「母親」は丁玲の母をモデルに、清末から辛亥革命を経て、一九二七年の北伐國民革命から執筆當時の土地騷動に至る社會の大變動を描き出そうとした長編小説。掲載紙『大陸新聞』の發禁處分と續く丁玲自身の逮捕によって中断、辛亥革命の勃發までで未完に終わる。文革後も「母親」を書き繼ぎたいと強く願っていたが、結局實現しなかった。封建の大家庭の桎梏を脱け出し、教師として自立する道を歩んだ、一世代前の先驅的女性としての母を記念すると同時に、當時母と同じく夫(胡也頻)を亡くし、左聯の機關紙『北斗』の主編、中國共產黨への入黨と、革命の道を進みはじめた丁玲にとって、自己への勵ましでもあったろう。完成していれば、轉換期の歴史を映し出す大小説になっていたであろうが、未完の現在のままでも十分面白い。前半の舞臺が臨澧の蔣家で(小説ではそれぞれ靈靈塢、江家)、後半が常德の余家(小説ではそれぞれ武陵、于家)となっており、ほぼ實際に忠實で、丁玲の幼時を知る上でも貴重である。

(7) 「金色的陽光、灑遍了田野、一些割了稻的田野；灑遍了遠遠近近的小山、那些在秋陽下欲黃的可愛的無名的小山。」一九三三年六月良友圖書印刷公司單行出版『母親』三六年四月第二四版より。

(8) 「對面山脚邊，有幾個小孩騎在牛背上，找有草的地方行走。不知道是那個山上，也傳來叮叮的伐木的聲音。」

(9) 『丁玲在故鄉』七五頁「丁玲在臨澧縣的講話」

(10) 丁玲「我母親的生平」『芙蓉』一九八〇年三期

(11) 注(9)に同じ。なお一九七九年中島みどり氏のインタビューには、上海平民女學校を退學した後南京放浪に行き詰まって歸郷したと答えている。(「丁玲に聞く」『颶風』第二二號一九八〇年四月)どちらにしても一九二二年のことだが、上海での挫折を経て、故郷の生家に歸って自分の出自を知ろうとしたという言葉の方が本當かも知れない。

(12) 『丁玲在故郷』一七頁「故郷情」

(13) 「這次我又回到湖南，不到臨澧，好似無情。但我想了想，對這個地方還是有感情的，因為我對鄉親們的生活，還是很掛念的。在短短的三天里，我看到這裏各方面的變化都很大，我心裏非常高興。」注(9)に同じ。

(14) 涂紹鈞「一代文宗革命人——記丁玲同志故鄉行」『桃花源』一九八三年一期。

(15) 『丁玲在故郷』四八頁「難忘啊，母親」

(16) 注(9)に同じ。

(17) 『丁玲在故郷』三七頁「她笑在菊花叢中」

(18) 『丁玲在故郷』五三頁「綿綿的鄉情」

(19) 辛亥革命前は湖南に公立の女子師範はなく、辛亥革命後一九一二年から相次いで三校の省立女子師範ができ、第一女師は長沙に、第二女師は桃源に、第三女師は衡陽に設けられた。『向警予傳』一九八一年五月人民出版社。

なお桃源女子師範については、釜井卓三氏の紹介「桃源女

子師範の丁玲」『東方』二六號一九八三年三月)がある。

(20) 「現在在一個風景很好，建設在鄉間的大學校中，實在覺得自由。同學們又都是沅江上游各縣來的人，比較直率開朗，所以我就盡情享受這悠然自得的新生活。」丁玲「我的中學生活的片斷——給孫女的信」『作家的童年』叢書第一集『我的童年』一九八〇年六月 新蕾出版社。

(21) 今でこそこんなところになぜ洋風の建物がという感覚だが、一九〇五年に長沙が開港してから列強が租界を設けるなど、長江を通じて湖南は上海など大陸沿岸部と變わらぬくらい歐化していたと聞が、その一端かも知れない。沅江、洞庭湖、長江と河の流れが桃源と外界を結び付けていた。

(22) 「那樓上是我們的宿舍，下面就是教室，我們在那裏上課、自修。」『丁玲在故郷』三〇頁「回桃師」

(23) 注(20)に同じ。

(24) 「那時我們就在這裏集會、還舉行講演、文娛晚會。」注(22)に同じ。

(25) 丁玲「我怎樣飛向了自由的天地」。(一九四六年五月『時代青年』。一九五一年七月人民出版社『跨到新的時代來』初收)。なお、學生會のリーダーに楊代誠(王一知。彼女の回憶錄「走向革命——五四回憶」と「五四時代的一個女中」によって桃源女子師範での五四運動の熱狂ぶりが知れる)、王淑璠(王劍虹。後丁玲の無二の親友となる。瞿秋白の最初の妻)がいた。

(26) 「我個人的思想，受我媽的影響，比較複雜一點。對封建社會、舊社會，很不滿意。有改造舊社會的一些朦朧的想法，但究竟該怎樣改，怎樣做都是沒有一定的道路的。」注(20)に同じ。

(27) 「因此除了我母親以外，那時我最信奉的便是九姨了。」丁玲「向警予同志留給我的影響」一九八〇年一月『收穫』第一期。

(28) 丁玲の母と向警予は、常德女子師範の閉校後長沙の湖南省立第一女子師範で學んでいたが、母は經濟的に行き詰まって一九一三年に桃源に小學教師として赴き、丁玲は獨り長沙に残って第一女師の幼稚園に寄宿し、その間向警予がよく面倒をみてくれた。しばらくして丁玲も桃源の小學校に移り、まもなく母と共に常德にもどるが、向警予の方も一九一四年秋、第一女師の校長を兼任していた朱劍凡が進歩的な思想のために湖南省督軍ににらまれて辭職させられたのに憤慨し、陶斯咏（陶毅）と共に周南女中に移った。

(29) 朱劍凡は一九〇二年日本に渡って師範教育を學び、東京で黃興、陳天華、周震麟らと交わり、教育救國に志した。一九〇四年に歸國、女學を興す決意をし、一九〇五年五月に私邸の園林の半分を割いて學舎にあて、女學を禁じた清朝政府の目をごまかすために周氏家塾（彼の先祖は明の王室吉王の末裔で、清朝政府の迫害を逃れるために、吉の字に門構えを加え周と改姓、辛亥革命後朱姓に戻した）と名付けたのはじまり。一九〇七年周南女學堂と正式命名。『周南中學八十五年校慶記念冊』『解放前的周南女校』より。

(30) 「我在周南是一個啓蒙階段，周南更多的是在政治上培養了我的革命趨向，但在文學上也孕育了我的愛好。」『周南中學八十五年校慶記念冊』『丁玲大姐在母校的一次談話』注(29)に同じ。

(31) 注(29)に同じ。

(32) 「後來有人寫材料，說我帶領群眾上街反趙恒惕，我沒有，不要把別人的事全往我身上拉。周南參加了省學生會，周南的學生會是進步的，當時有勞君展、李白璧、我那班有周敦祐。我不是領袖，我是抱着追求光明，追求新思想的朦朧望來的。」注(30)に同じ。

(33) 同時に入學したのは、許文煊、周毓明、王佩瓊、楊開慧（毛澤東の最初の妻）、楊沒果、徐潛（徐特立の娘）の五人。注(20)に同じ。

(34) 一九八七年七月 湖南人民出版社發行。

(35) 「我對學習的前途，學什麼走什麼道路，總是常常思考，願意摸索前進，而且也仍然感到有些彷徨和苦悶。」注(20)に同じ。